

以前、「国語の窓」というものを出していた。「校長室だより～燦燦～」や「校長通信～夢拓く～」とともに出していた。令和4年5月9日に第1号を出した。最終号は、令和5年3月20日の第213号だった。

校長室だよりには、反応がある。その読者によって、見方や考え方も違う。それがおもしろい。一方、「国語の窓」の方は、ほとんど反応がない。それはそうである。中身が、国語の話である。それもほとんどが中学校のことである。自ずと読者は限られる。

この前、うれしい反応があった。ある先生からお電話をいただいた。その先生は、現在、以前私が務めていたポストで活躍中である。今年度で3年目になる。このコロナ禍の中、多くの困難があったはずである。

いろいろな話をしているうちに、「実は校長室だよりを読んでいるんです」という話になった。よくあるパターンである。「『国語の窓』も読んでいました」これは、あまりないパターンである。私は反応した。その先生は、中学国語の同業者である。少しは、お役に立ててよかった。

その先生が初任者のときに、研修担当者として初めて会った。物腰の柔らかい、好青年だった。謙虚だった。これから伸びていく可能性のようなものを感じた。吸収しようとする意欲もあった。その後も、努力を重ねて、理想とする国語の授業を追い求めてきたのだろう。

現在は、研修担当者として、主に若い先生方を育てる立場にある。きっと自分の経験が生かされているはずである。そこに、「国語の窓」が少しでも役に立っているとしたら、うれしい限りである。紙面には、うまくいったこともあれば、うまくいかなかったことも入れてある。私なりの分析もある。それは、生徒の姿や声を基にしてある。

「国語の窓」は、改めてこのために原稿を作成したというよりは、以前からとってあった資料やファイル、パソコンのデータを引っ張り出して原稿にしたものである。毎日ホームページにアップするため、一話完結型を目指した。しかし、A4判1枚に収めるのは、なかなかむずかしいことだった。その結果、随分と読みづらいものになってしまったと反省している。

この「国語の窓」が、『表現者を育てる授業－中学校国語実践記録－』の元原稿となった。「国語の窓」がなければ、その後の書籍刊行もなかった。継続は力なりということか。

「校長室だより」「校長通信」そして「国語の窓」の読者であるその先生には、書籍をプレゼントした。ご丁寧に、そのお礼の電話だった。話していて、何だかうれしくなった。私は引退していく。後はこの先生のような方が頑張ってくれるだろう。自分としては、書籍を通してバトンを渡したつもりなのかもしれない。バトンは渡さないと、走り続けることはできない。彼のこれからの活躍が楽しみである。